

「こんなものを読んできた」(43)

「イクサガミ」1～4 今村翔吾（講談社文庫）

校長・鈴木 健

まず最初に「面白かった」と書いておきます。どんなお話かと言うと…。

明治11年、最後の武士の反乱「西南戦争」も終わり、文明開化が急速に進んでいました。武士の没落と共に、武士の誇りであった武道も金をもらって技を見せる「撃剣」になり下がっています。元武士の嵯峨愁二郎は、大金を提示して武技に優れた者を募集する新聞記事を見ます。コレラ（病気の名前）に罹った妻子を助けるため金が必要な愁二郎は、集合場所に指定された京都の天龍寺に行きます。

そこに現れた謎の男たちは、集まった武芸者たちに「蟲毒（こどく）」というゲームの提案をします。1人1枚の木札を持って1か月以内に東海道を東京まで行くこと、優勝すれば賞金10万円（今だったら10億円以上の価値）がもらえること、ただし途中の宿場に設定された関門を通過するには一定枚数以上の木札を集めなければならない（人から奪う）こと、途中で抜けようとすれば命はないこと等を申し渡します。

開始の合図とともに木札を奪い合って武芸者たちの殺し合いが始まりますが、愁二郎はその真ん中に、何の武芸の心得もなさそうな少女、双葉がいることに気が付き、思わず助けてしまいます。双葉も愁二郎と同じように病気の母親を助けるために、この殺人ゲームに参加していたのでした。愁二郎は双葉を見捨てることができず、二人の東京を目指す旅が始まります…。

この小説の良いところは、登場人物たちが変化し成長していくところです。ヒロインの双葉は、最初は愁二郎に助けられるだけの無力な少女と思われましたが、だまし合い殺し合うゲームの中でも、人を信じ人を助けようとする生き方を崩しません。最初は利害関係から手を組んだ仲間たちも、双葉に影響されて変わっていきます。特に悪党グループの使い走りにされていた進次郎というヘタレな若者が、次第に成長していく辺りはいい感じです。

また愁二郎や双葉の仲間たちとは対極に、ひたすら武にこだわり、闘争や殺人を楽しむ敵役たちも不気味で悪役としての魅力があります。

迫力のある戦闘シーンやスピード感のあるストーリー展開はラノベ風ですが、人物描写が丁寧で、幕末から明治初期という時代背景もしっかり描きこまれているので、読んでいるうちに物語の世界に引き込まれていきます。最近の時代小説にはあたらしい境地を開こうとして珍奇な設定に走るものがありますが、この作品は武芸者たちが奥義（ちょっと魔法的なものもある）を競い合うという、ストレートなお話です。

ネットフリックスで岡田准一（アクションがすごい人ですよ）が主演してドラマ化されているので、そっちも見てみたいと思っています。